

詠人 白子

モルガナイトはごみ箱の方へ

ずるい人だ。手を伸ばして、いたずらに触れて、輪郭をなぞって、そのくせこちらがその手を掴もうとすると躲してくる。艶を帯びた頬、唇、肌が下肢に火をつけて消火もせずに去ってしまう。そこに感情はない。ああ、もう、ずるい人だ。

「終電だいじょうぶだっけ？」

「大丈夫」

とりあえず最低限度の生活をしています、というような小さな部屋で、相川がスマートフォンをこちらに向けた。終電の二本前。今すぐマンションを飛び出して駅に向かえば、私は問題なく自宅に帰ることができる。でも投げ出された両脚はびくりとも動かない。

相川も私が帰るとは思っていない。週に一回気まぐれな連絡と共に呼び出して、私の終電を把握しているはずなのに毎回確認してくる。帰ってもいいんですよ、逃げてもいいんですよ、と逃げ道を案内しているようで、私自分から帰らないと選択するように導いている。

そっか、と誰に言うでもなく相川が呟くと、スマートフォン画面が暗くなった。切り取られた青空と緑、顔をそちらに向けているワンピースが、視界から消える。何処だかわからない、誰だかわからない。

「もう一本飲む？」

「飲む」

「はい」

それなりに空き缶を増やしているはずなのに、相川は顔色一つ変えていなかった。

「なんでもいいよね、はい」

「ありがとー」

手渡されるのはいつだって、度数が片手で数えられる

くらいの、おもちゃみたいなお酒だ。私はこれでいいとして、相川も同じプルタブを引く必要はないのに。

「あいかわ」

「なあに」

「好きな飲みだよ。ウイスキーとか焼酎とかあるんでしょ、私に遠慮しなくていい」

プルタブに口をつけた相川が、すつきりとしたつり目を少しだけ見開いた。相川の部屋に知らないお酒が隠されていることは知っている。ジュースみたいなお酒よりもそっちを好むことも知っている。私を気遣って合わせてくれているんだとしたら、そんな無駄なことなどしてほしくなかった。

とん、とんと細長い指が濡れたラベルをたたく。

「野暮なこと聞くね」

「え？」

白いローテーブルを挟んで向かい合っていたはずなのに、不意に移動して身体を寄せてきた。息が詰まる。その細い指が私の首に絡んでいるようで、思わず自分の首を撫でた。かすかに煙草の匂いがする。私の前では一度も吸ったことがないのに。

「好きな飲んだらさあ、頭回んなくなるよ」

頬をなぞった指で、顎を持ちあげられる。指の感触に声が出そうだった。爪が切られている。熱っぽい肉に覆い被さられて、その柔らかさに眉を歪めてしまう。

「あつい」

「がまんして」

「煙草くさい」

「脱ぐから平気でしょ」

腕を回した背中にわずかながら出っ張りがある。そこに手をかけてホックを外してやると、あはは、と乾いた

笑い声が聞こえた。襟足が長いショートヘアの、まるい後頭部が見える。耳朶に吐息がかかれば、もうなにも言うことはなかった。所在なさげなお酒だけが、重力に従って二筋水滴を落とす。

はじまりは白枇杷を剥いたとき

相川とは大学の講義で会ったのが最初だったはずだ。適当にチームでデイスカッションしてください、という指示に振り返ると、斜め後ろの席に座っていた。それだけだ。深爪だなあ、と思った程度で、あとはどんな印象も抱かなかった。自己紹介で同じ学部だとわかって連絡先を交換しただけで、特に親交を深める気はなかった。

「茜ちゃんね、よろしくね」

「うん。よろしく」

定型文みたいな会話をした時に、スマートフォンの画面が見えた。小さな世界に閉じ込めるように、背を向けたワンピースの女性が立っていた。相川にしては雰囲気が違うな、と目を留めてしまった。相川は黒髪のショートヘアだしシンプルなパンツスタイルだけど、画面の女性は編み込まれた茶髪のハーファップで、甘いチェック柄のワンピースだから結びつかない。好きなモデルさんかアイドルなのか、と顔を上げると、つり目がこちらを見据えていた。

「茜ちゃん」

「え、な、に……」

スマートフォンを揺らして、海の底を飲み込んだ瞳が細められる。赤い唇がたわんだ。

「今度飲みに行くか」

ずるずると連れて行かれた居酒屋で、相川は雑談のようにいろんな話をしてくれた。女の子が好きで、今は特

定の相手を持つていないこと。でも曖昧に繋がっている人が数人いること。ロック画面の女性の話は、してくれなかった。

「きもちわるい？」

反射的に首を横に振ると、安心したように顔が綻ぶ。

「よかったあ。茜ちゃんなら、大丈夫だと思うって」

あんな適当なデイスカッションで何の信頼関係が築けたというのだろう。相川が濃いめのハイボールを煽ると白い首が動いた。出っ張りもないならかな白。

「髪の毛、きれいだね。何色？」

「ん、あ、今はミルクココアブラウン」

「めっちゃ美味しそうな名前」

入学して何度も染めているから傷んでいる部分もあるのだけど、相川はにこにこ髪を見ていた。つり目がこちらを見透かしている。その瞳が私を捉えていないことは、いやでもわかった。私はその目に捕らわれて、ああ馬鹿なことをしてしまったなどと心臓が痛んだ。

ジューシーオレンジに齧りつく

何回目かの誘いで、居酒屋の気分じゃないからと相川の家と呼ばれた。小さな部屋に簡素な家具だけが押し込まれた、世界の片隅。コンビニで買った缶チューハイを傾けながら、いつもよりずっとペースが遅い相川が隣で鼻歌を歌っている。終電はもうないと告げたときから、ずっと。

「なんの歌、それ」

「んー、内緒」

宇宙人はこの切り取られた部屋も侵略するだろうか。

揺れた缶が水音を立てる。

「やっぱ茜ちゃんの髪きれい」

「相川も染めればいいのに。似合うと思うよ」

「ふふ」

髪の毛に指を挿し込まれて、毛先まで梳かれた。長さを確かめるように下ろされた指が毛先を撫でる。相川の黒髪は光をたたえていた。もう一度髪の毛を撫でていく指が、そのまま頬にあてがわれる。声を上げるより先に相川が缶をテーブルに置いた。

「茜」

なに、とは聞けなかった。自分と同じ性別の、黒くて静かな目にひれ伏して、おとなしくまな板に身体を投げ出すしかない。相川の指で耳をふさがれる。

ロック画面の女性が脳裏に浮かんで、かき消すように唇をふさいだ。新月が深くふかく夜を溶かす。

ランサ食らわば皿まで

お酒と終電のせいにして流れるようにつながった関係で、なんとなくずるずると片手で数えきれないほどの夜を過ごしてしまった。メッセージの通知に手を引かれてそれまで知らずともしなかった世界を見せられた。暴かれたくない部分まで暴かれて、暗がりをお願いすることに好き勝手に息をした。

「なに」

「……いや、なんでも」

「ええー、酔ってる？」

相川が笑顔を貼り付けている。向かい合ったローテーブルに鎮座した缶が、ただ冷たい汗をかいていた。なんか食べるものとしてくるわ、と立ち上がった所為で布が擦れて、色濃い煙の匂いがした。いつもの煙草の匂いじゃない。いつもの煙草の匂いもなんだかよくわからないけれど、これよりはもう少し甘い匂いがしたはずだ。

「お菓子しかないわー、はい」

ああこれ今日ないな、とすんなり理解できた。今日が初めてではない、過去に一回だけ、相川が似たような顔と似たような匂いをまとっていたことがあった。その日は夜を越さなかった。だから、わかる。

「茜、終電確認しときなよ」

「うん」

時計はまだ余裕があったけれど、このままここにいても意味がないことは知っている。駅まで送られるだけだということも知っている。そんな日になんで呼ぶんだよと文句を言いたいくらいだった。

「これ食べたら帰る」

「ああ、じゃあ送ってく」

呼び出されても必ず触れられるわけではない。私たちは明確な名前を持たない関係で生きているし、連絡が来なければいつだって切れる繋がりだ。現に相川の匂いが何の煙草なのか、誰と会っているのかは知らない。知らないけれど、その誰かの髪色だけはたぶん予想が当たっている。わかって来ているのだから私も大概だ。

「明日は雨みたいね、今日は満月なのになあ」

スマートフォンを眺めている相川が、独り言のように呟いた。スナック菓子を口に運んでいたから返事はできなかったけれど、顔だけは相川の方を向けた。

向けなければよかった。

深海をくり抜いて注いだ瞳に、火がともっている。紫煙の名残かふちがぼやけてにじんでいる。小さな画面に向けられた表情には、ほのかに熱が見える。天気予報なんて見ていないのだろう。

ぱり、と音がして、乾いた塩分が舌に刺さる。

あの日の目と、髪を梳いた手に植え付けられた小さな

芽は、煙草の匂いに眩みながらも、摘み取ることができないままだった。満月はうるわしいまま佇んでいた。暗闇に光る大きな光を、綺麗だと思った。

ごめんね粉々アメジスト

空虚を埋めるものはいっただって指。もしくはエラストマー。シリコン。塩化ビニール。セラミック。天然ゴムラテックスあるいはポリウレタンに覆われた人工の模型が熟れたくだものを撫でていく。揺すられて、埋め込まれて、出口のない感情がはじけるまで。

くだものの皮をむくときの、固形からにじむべたべたとした液体が指を濡らしていくような、あの感じ。蛇口を捻って手を洗ってしまえばきれいさっぱり元通りになる。何も残せない。あの感じに似ている。

「なに考えてたの」

「……なんも」

「うそだあ」

わざとらしく明るい相川の声が掠れている。けれど私の声の方がずっとひどい。皺の寄ったシートをキャンバスにして、私の髪の毛が乱れていた。それをていねいに整えるように、ふやけた指の腹が撫でていく。

「ごん、とかわいらしく重たい音がした。足を伸ばした拍子に何かを蹴つ飛ばして床に落としてしまったらしい。何が落ちたのかだいたい見当はつくが、電源が入っていないようなので放っておくことにした。もう拾い上げる体力がない。」

「髪色」

「ん？」

「髪色、変えようかなって」

ああ、と引き攣った声は、暗がりの中に消えた。

「別に変えなくてもいいんじゃない、似合うよ」  
平静を取り戻そうともがいたのか、相川の指が少しだけ跳ねる。

「茶髪じゃなくなったら、どうする？」

「別に」

肩をすくめて笑われた。

「茶髪がいいんでしょ」

「んん？」

「茶髪じゃなきゃ嫌なんですよ」

誤魔化すように、はぐらかすように、手を引かれて腕の中に招かれる。首を振っても抱き込まれて、やわらかい体温が身体にあたった。女なのに唇を噛みしめる。同じ女なのに、同じ髪色なのに、どうして私じゃ駄目なんだろう。

「ねえ」

「なに」

「あのスマホの女の人、だれ」

面倒なことを言ってしまったと後悔しても遅い。ボデイウォッシュと汗が溶けた匂いに顔をうずめて、処刑を待つように目をつぶる。

「ともだち」

「嘘。友達のことずっとロック画面にしないでしょ」

「ともだちだよ」

目の前の柔らかい皮膚に歯を立ててやりたかった。相川は自分がどんな目をしてスマートフォンを見ているか気づいているのだろうか。どんな表情で、ベッドの上の私の奥を見ているか気づいているのだろうか。友達なんかじゃない。友達にしか、なれなかったんですよ。

後頭部に手が添えられて、叩き落としたいのに、拍動が喧しくなる自分に吐き気がする。

「中学の同級生でね、同じバレーボール部だったの。毎日練習一緒にして、合宿も試合も一緒にいた。かわいい娘だったよ」

「それで好きになったの」

「好きなんて、そんな綺麗な感情じゃないよ」

眩暈がした。ずるい人であるはずの相川が、誰かのために感情を動かしている。熱を帯びている。手を伸ばされたら喜んで掴むのだろう。視界がぶれそうだった。

「なんで友達のままにいるの」

「話したくない」

「なんで」

ふう、と肺が動く。

「……ともだちでいいと思ってるから」

友達でいいと思っている人が、髪色と性別が同じだけの人間に近づくだろうか。相川の軸が歪んでいて、アンバランスで、人間らしい。苛立つほど。

白々しい月明かりに相川の輪郭が照らされる。

「終わるくらいならともだちでいいんだよ。一生。一番近い人になれればいいの」

「近い人」

「そう。それが幸せだから。私にとっても」

一文字一文字、確かめるように、相川がなぞる。幼子に言い聞かせるように、咀嚼させるように。私の目の前にある胸の拍動が悲しいくらいに穏やかだった。

そんなことを幸せだとラベリングしているのか。自分の感情を必死に切り捨てて、捨てきれなかったからこうして紛い物に投影しているのか。相川が頬にかかった髪の毛を払う。毛先が首に張り付いている。

「相川は」

相川は、何回自分の首を絞めたの。

「なに？」

「なんでもない。離して」

腕の拘束から抜け出して、放られた自分の鞆を漁る。お腹の奥で燻っている感情が落ち着かない。がくがくと震える足を叱咤しながら、やっと鞆から目当てのものを引き抜いた。煙草の匂い。煙の匂い。吐き気と、衝動的な苛立ちが身体を支配する。

顔を上げると二日月が目刺さる。

ボトルのキャップを回すと、かすかにホワイトトリリーが香った。上半身だけを起こした相川に跨る。

「手、出して」

「手？」

抵抗もなくすんなりと差し出された手に続く、弾力のある手首を捉える。びくついたけど構っていられない。プシュ、と軽い軽い音がして、ホワイトトリリーが濃くなった。

「香水……？」

いい匂いする、と唇の端を緩ませる相川の表情に、心臓がつつかれる。空気に混ざって柔らかく広がる匂いがベッドの上を神聖なものに錯覚させた。

「ああ、これ茜の匂いだ」

そんなことを小さく呟かないでほしい。私の匂いなんてたいして知らないくせに。相川の弧を描いた肌色の輪郭がどこまでも肌色で、ざわめきも燻りも感じられなくて、鼻が痛んだ。

「私の匂いだよ」

私の匂いを、覚えていてほしい。この暗がりを目光が殺したとしても、日常の中でこの匂いを嗅いで思い出し、てほしい。願わくばその瞳を揺らがす匂いになりたかった。私の存在とこの匂いを結び付けて、相川を閉じ込め

る枷にしたかった。

唇が震える。見下ろした相川が遠く見える。ああ、相川が私の前で煙草を吸わないのって、きつと。

「……茜？」

跡ひとつついていない自分の手首に、ホワイトトリリーを落とした。自分のものと相川のものを重ねて、体温を溶かすように擦り付ける。肌色は影を帯びて輪郭線を際立たせていた。

私の首も胴体も、相川の背中も内腿も、滑らかな肌色一色で覆われていた。きれいなままだった。裂け目も花びらも散っていない。暗がりから放り出されれば迷子になっってしまう。縫りつくように手首を強く押し当てた。

まるく見開かれていた相川の瞳が、静かに目蓋で閉ざされた。見えない手綱を引かれて真赤の唇に齧りつく。被さった私の動きに合わせて、ミルクココアの毛先が空に滑り落ちた。口腔の奥で舌打ちして掻き上げる。スプリングが鈍く軋んだ。桜なんて咲かないくせに。

「あいかわ」

私を見てよ。角度を変えて、唾液で光る舌を追いかけた。茶髪じゃなくて、まるい膨らみと肉付いた身体じゃなくて、その中で息づいている私を見て。知らない煙の匂いなんてさせないで。ホワイトトリリーに溺れて染まっ。わざとらしい水音が鼓膜を塞いでいく。あのロック画面じゃなきゃ駄目な理由を教えてください。

薄く霞む二日月がにじんだ光をこぼす。

酸素が薄くなる。息継ぎすら惜しくて、俗的なつながりをほどこくことすらこわかった。押しつけた手首がしびれるように熱い。ぜんぶ私の体温。濡れそぼった唇に舌を這わせて、歯列をなぞっていく。ベッドがいやな音をたてた。薄く目を開くと、相川の自由なほうの手がシー

ツを泳いでいるのがわかる。探るような動きを見せている。相川、たぶんもうそこにはないよ。ベッド下に落ちたんだよ。

擦り合わせて汗が滲んだ手首を離す。腫れた唇を解放してやると、瞳は静かな水面をたたえていた。視界がぼやける。何をしても私ではその瞳を変えることができないのだと、見せつけられている気分だった。真赤が薄らとぼやけている、それだけ。

「あは、茜からなんて珍しい」

耳にかけたミルクココアブラウンを指先で掬われる。

「もう一回？」

広げられた両腕に納まると、いつもの煙草と、ほんの少しだけホワイトリリーが鼻腔をくすぐった。ばらばらに広がった髪を丁寧に撫でられる。剥き出しに晒されたくちびるに歯を当てて、やっぱり噛むことはできなかった。私がいくらホワイトリリーを押し付けたところで何も変わらない。煙の匂いは一生消えない。私たちフレンドにはなれるけど、友達にはなれない。絶対に。

白く晒された喉に指を這わせて、唇を落とす。子どもみたいなリップ音。平たい喉を数度やわらかく食むと、汗の匂いがした。

「まって茜、私汗かいてるんだった」

「今更じゃない？」

「いや、んん。まあ、そうか……」

艶めかしく光沢を帯びる首から下の肌に、こんな唇で触れることは気が引けてしまう。凹凸のない滑らかな喉が反らされると、眼前に絶景が広がる。男ならば出っ張りがあつたであろう部分に歯を立てると、ひゅつと相川の喉が鳴った。掠れた声にならない声がふるえている。相川が唾液を飲み込んだせいで、肌色がうごめくのが唇

越しに受け取れた。

舌を這わせて、頭と肩だけを起こしている相川的首筋までたどり着く。伸ばしていた舌を引っ込めると、両頬が生暖かい体温に挟まれた。押しつけようとしていた唇が、行き場をなくしてしまった。

「だめ」

左側の体温が移動して私の唇をふさいだ。柔らかな手のひらが頑丈な檻となる。

「ごめんね」

薄く開かれた口の端がへらへらと持ち上がっている。静かな瞳のいちばん奥深いところで、乾いた黒がこちらを映した。あいかわ、とやっとの思いで呟いたはずの聲が、手のひらの肉に阻まれて熱っぽい吐息に化ける。

たぶんわかっている。相川は全てわかっている。この唇のことも。わかっている、今、その手でふさいだ。

「ごめんね、茜」

頬を包んでいた手と、口をふさいでいた手が、揃って耳元から髪に挿し込まれた。二人の息遣いが遠くなる。月明かりはやや白みがかつた空にぼやけていた。目の前のまるく肉付いた身体に手をあてがうと、しつとりと汗で濡れている。相川の輪郭を辿っていく私の指が、笑ってしまうくらいに冷たかった。三日月はその姿を消してしまっている。ああ綺麗だ。綺麗だった。

月が息をひそめてしまえば、黒塗りの夜は日常に引っ剥がされる。そんな適当な夜を何度も続けて、太陽の光に中指を立てているのだ。そういえば今日は何限から授業が入ってるんだったか。

握り込まれている側頭部の茶髪が痛い。数束の髪の毛を引っ張られて、何本か抜け落ちる感覚もあった。この茶髪だろう。この茶髪とまるみのある肉体だけが、相川

のシナプスを焦がして感情を露にさせるのだから。

「今度さあ」

「うん」

「ワンピース着て来たら、うれしい？」

返事の代わりに背骨をなぞられて、肌がざわめいた。しゃくりあげるように顔を上げると顎を捕らえられる。頬にキスをされて、いたずらに舌先で舐められた。

「くすぐりたい」

「がまんして」

「さっきも言われた」

相川が不意を突かれたような顔をして、綻ばせる。柔和に細められた瞳は、こっちを見ていなかった。最初からホワイトリリーに勝ち目はなかったのかもしれない。

次に会うときは、一番あれに近いワンピースを着てきてやろう。私はもうそれくらいしかできない。

ああ、私今、首を絞めている。